

ZOCALO 2014 6 ▶ 7

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

建築家は考える

企画展「戦後日本住宅伝説 — 挑発する家・内省する家」
会期：2014年7月5日（土）～8月31日（日）

<住まい>は人間の生活の基本です。「戦後日本住宅伝説—挑発する家・内省する家」展は、生活の基本となる住宅に焦点を当てた、それも主として独立した戸建て住宅についての展覧会です。戦後の1950年代の住宅作品から始まり、1970年の万博を経て、建築家の眼差しが強く内部へ注がれた70年代まで、16人の建築家の16作品で構成されています。

戦後の日本において、生活スタイル、また、工法や建築素材も変化していく中で、住宅をどうとらえてどう表現していくか、伝統も参照しつつ、日本の都市の状況のもとでモダンなスタイルをどう追求していくかなど、建築家の戦後の住宅への試みは様々な形でなされてきました。

最初に紹介するのは、戦前から国家的なプロジェクトを手がけてきた丹下健三の《住居》(1953)です。ル・コルビュジェの考え方を咀嚼しながら、日本の伝統建築を再解釈し、美しく完結した世界を見せています。当時の建築家は日本の伝統についても深い考察を加えており、清家清の《私の家》(1956)の一室状の空間は

爽快な姿を見せています。時の経過とともに家族の形態も変化し住まいも変化する、というコンセプトの菊竹清訓の《スカイハウス》(1958)は、新しい建築のあり方を示していました。その増殖していくという発



菊竹清訓《スカイハウス》1958年 ©新建築社写真部

想は、当館の公園にその一部がある《中銀カプセルタワー》(1972)に脈絡を持っています。都内の一角、6坪の敷地に地下1階地上4階の塔状に建つ東孝光の《塔の家》(1966)は、都会の狭小な土地との格闘の中から生まれた建築家の発想で、その斬新な姿は際立っています。

様々な状況が建築を取り巻いており、国の住宅政策の貧困さはよく指摘されますが、その政策に密接な関連のある建築界が、狭小で似たようなタイプの住宅を都市で生み出していたことも事実でした。こうした状況に異議を唱えたのが篠原一男で、「住宅は芸術である」(1962)として住宅建築の重要性を宣言し、《白の家》(1966)などの作品を発表していきます。国家的プ



篠原一男《白の家》1966年 ©新建築社写真部

ロジェクトである1970年の万博が終わると、建築家の眼は強く内部に向けられ、毛綱毅曠の《反住居》(1972)、石山修武の《幻庵》(1975)など新しい発想の作品が発表されます。家の中を移動するとき傘を必要とするという安藤忠雄の《住吉の長屋》(1976)も、こうした中のひとつです。

この展覧会は、今や伝説ともなった戦後住宅の、挑発し、あるいは内省する作品とそのコンセプトを紹介することにより、建築家が私的な居場所である住空間に対して、芸術性を視野に入れてどう取り組みのような解答を引き出そうとしたかを探ろうとするものです。16人の建築家はすべて戦前生まれですから、作品の底に流れる共通の要素が見出されるかも知れません。

現在も様々な住宅が生まれています。日本の<住まい>は、必ずしも恵まれた状況にはない気もしますが、どうでしょうか。この展覧会が、<住まい>を見つめ、思索を深めながら、新たな視点を見出す機会になればと願っています。(H.I.)



石山修武《幻庵》1975年

MOMASコレクションⅡから読むように見ること—荒川修作の絵画

1961年の暮れ、25歳の荒川修作(1936-2010)は手提げ鞆ひとつで日本を飛び出し、大雪のニューヨークに降り立ちました。荒川は芸術の中心地としての地位を確立しつつあったこの都市を拠点に、矢印や言葉を用いた独自のダイアグラム(図式)絵画や、詩人マドリン・ギンズとの共著『意味のメカニズム』(1971)などの思考実験的な作品を次々と発表し、現代美術の世界にインパクトを与え続けました。昨年度、渡米後まもない時期に制作された作品を含む荒川修作の絵画4点が当館に寄託されました。今回のMOMASコレクションでは「読むように見ること—荒川修作の絵画」と題して、既収蔵作品とともに紹介します。

荒川が60年代初頭に制作した作品は、光を放つような乳白色のキャンバスに最小限の基礎的な線と輪郭、文字、極度に抑制された色彩で構成されています。荒川が「絵になってしまう前で止めておきたい」と語ったこれらの作品に向き合うとき、鑑賞者はその線や記号を読み解き、描かれていないイメージを想像することを求められます。網膜上で単一の明確な像が結ばれる現象ではなく、不分明な要素を手がかりとして鑑賞者が多種多様なイメージを心の中に浮かべることこそが「見る行為」であると考えた荒川は、そうした体験へと誘う作品を制作しようとしたのです。この実験的なアプローチは、他分野の担い手(哲学者や科学者)からは、人間の視覚や知覚のあり方に対する根源的な問題をテーマにした試みとして驚きをもって迎えら



荒川修作《彫刻する No.2》1962年 寄託作品/株式会社ABRF蔵

れ、広く支持されることとなります。

後年、荒川は平面での表現を離れ、人間の身体感覚に直接働きかける建築的な作品を展開していきます。そのひとつである天命反転住宅を舞台としたドキュメンタリー映画『死なない子供、荒川修作』(2010)の上映会を、関連企画として開催します。また、上映後には、本作の監督で三鷹天命反転住宅の住人でもある山岡信貴氏にお話を伺います。荒川の誕生日(7月6日)に開催される本イベントが、コーディネジスト(coordinologist: 芸術・哲学・科学の総合をめざす創造家)荒川修作への多角的な関心の契機となることを期待します。(I.O.)

平成25年度新収蔵作品のご紹介

大規模改修工事のため、昨年度下半期に休館していた当館ですが、まるで平成27年度からの通年開館を応援してくれるかのように、質の高い、たいへん多くの美術作品や資料の寄贈に恵まれました。

東京都美術館での回顧展に続き、平成25年度の文化庁芸術選奨文部科学大臣賞を受賞された福田美蘭氏からは、初期の代表



福田美蘭《湖畔》1993年

作《湖畔》を含む2点のご寄贈を受けました。2点いずれもが、福田氏独特のユーモアや、芸術選奨の受賞理由となった美術史に対する批評精神がよく表れている作品です。双ギャラリーからは、現代美術家・菅木志雄氏の彫刻・ドローイング作品のご寄贈を受けました。海外でも近年評価が高い「もの派」を代表する作家の作品が一举に5点増えることによって、現代美術のコレクションが一層厚みを増すことになりました。平成19年度に50点におよぶ日本画の大型寄贈をいただいた大熊家のご一族からは、横山大観(1868-1958)1点を含む日本画5点を、また「日本の70年代」展でお世話になった画家・谷川晃一氏からは版画のポートフォリオをご寄贈いただきました。当館の活動に

深いご理解をいただいている篤志家の方々からも、画家・タイガー立石(立石大河彦/1941-1998)のイタリア時代を偲ばせる貴重な資料、日崎崎尊夫(1941-1992)の木口木版作品、彫刻家・建島覚造(1919-2006)のドローイングなどが寄贈されています。

県内で活躍した画家のご遺族からも、このたび重要な作品や資料のご寄贈がありました。飯能出身の画家・小島喜八郎(1935-2008)の作品としては、代表作《草夏》《草冬》の2点が新たにコレクションに加わりました。夏と冬に同じ草むらと同じアングルで描くというコンセプト、写真と見まがうほどのリアルな描写力、そして150号が2枚で1点となる大きなスケール。不思議な時間の感覚を感じさせてくれる対の作品で



小島喜八郎《草夏》1995年

す。日展で活躍した日本画家・三尾雄治(彰藍/1922-2011)の作品としては初期の代表作が1点、浦和を拠点に活躍した埼玉を代表する画家・高田誠(1913-1992)の手による瑞々しいスケッチが106点、挿絵原画をはじめとする小村雪岱(1887-1940)の大変貴重な資料なども収蔵されることになりました。雪岱の資料については、6月14日から始まるMOMASコレクション第2期のリサーチ・プログラムにて早速ご紹介いたします。

独立行政法人国際交流基金からは、実績ある海外写真巡回展の出品作品を3作家合計29点ご寄贈いただいています。いずれも日本人女性写真家の作品であることから、当館のコレクションの「幅」が一気に広がったように感じられます。そして現代版画を扱うシロタ画廊からは、実力派の画家・辰野登恵子氏と堂本尚郎(1928-2013)による大型リトグラフを合計5点ご寄贈いただきました。いずれも摺り・保存状態とも良好なので、展示するのが楽しみな作品です。

埼玉県立近代美術館は、今年9月から再び工事休館となります。今回新たにコレクションに仲間入りした雪岱以外の作品については、来年度以降、順次お披露目する機会を作っていく予定です。(T.S.)